佐藤敬、従軍地からの手紙

一九四一（昭和一六）年五月、画家佐藤敬（一九〇六～一九七八年）は、同じく画家の猪熊弦一郎と共に、支那派遣軍報道班員として中国大陸へ出発した。これは、ある画家の逮捕から、周辺が取り計らったことだという（迫内祐司二〇〇七）。この約三か月間の従軍については、翌年のフィリピンへの従軍と共に、後に回想を書いているが（佐藤敬一九七九）、当時、鶴見区の留守宅に送った数通の手紙が資料室所蔵佐藤美子資料のなかに残されている。これらの手紙から、佐藤敬の従軍の様子を紹介していこう。

五月一八日　上海から

日付が確認できる最初の手紙は、五月一八日上海からの発信（佐藤美子資料・資料番号Ⅳ―36―6）であるが、この手紙には「又南京に参ります」とあり、これ以前に南京におり、手紙も出していたようである。上海へは「急に浙江作戦に従軍する事になり、当地に参りました」とあり、次のように陸軍の重爆撃機に同乗している。

「重爆撃の飛行機に同乗する機会を得て、昨日は玉山の敵陣地の猛爆に参加しました。基地より銀翼を聯ねて十四機の出動は実に堂々たるものでした。約三時間にして敵の飛行場を発見、すごい爆弾の雨を降らせたのです。又玉山の市内外の敵の根拠地には百四十の爆弾をおとしました。幸ひにして全機無事その目的を果して無事帰着、大変得かたい感命（感銘）を受けました」と綴っている。同月、第四飛行団が台湾から転用、第十三軍協力の任務に当たっており、手紙が文字通りだとすると、「重爆隊亦全力ヲ以テ二次ニ亘リ出動シ衢県及玉山ヲ攻撃シ敵軍事施設及集積中ノ敵兵車輌ヲ或ハ焼上セシメ或ハ爆砕セリ」（第三飛行集団戦闘要報新第一三号、五月一七日）に同行したものと思われる。

この後、「更に四五日主として飛行機による従軍を続け、再び南京に引きかへし、今度は漢口岳州方面の第一線に出る予定です」と述べている。この予定は「朝日の支局と南京報道部ですっかりプランを作ってゐて、まず一通りその通りするつもりでゐます」とあり、陸軍の報道部と朝日新聞支局による計画であった。

従軍画家としては、「まだ作品は一枚も出来ません。一通り従軍が終らないととても絵なぞ描くような気持になりません。絵はやはり静かに落ついて初めて出来るものだと思ひます。が材料と資料はうんと取りました」と述べている。

五月二九日　第一線にて（応城）

その後、上海から南京に向かい、そして「南京を立って漢口まで飛行機で来ました」（Ⅳ―35―3）と漢口に向かった。漢口については「美しい街でしたが、さすが前線基地だけあって兵員の動きに厳粛な感激を受けました」と記している。この漢口には、「報道部に美校の下級生がゐたので色々助かりました」とあり、漢陽や帰元禅寺・古琴台・月湖へ「見物」に赴いている。漢陽については「狭い街の両側はまるでカイロかアラビヤの街のような不思議な生活図でした」と感想を記す。

その後、「漢口には二泊、どうしても最前線に出て行く方がいゝと云ふ事になって、僕等も一度是非第一線の緊張した空気を吸ひたいと思ひ、一昨日は漢口を立って軍連絡トラックに兵隊さんと一緒にのって応城に向いました」とあり、応城へ向かった。「一日焼る太陽の下を広々とした原野の白い一線の道を走るのです。沿線には水田に水牛が遊んでゐます。めずらしい色々な鳥が飛んでゐます、野兎も一向人を恐れずに遊んでゐます。トラックは段々悪路にはねかへりながら進んで行きます。腰をしたたか打って悲鳴をあげます。朝九時出発して三時に応城の城壁をくゞりました」と応城までの道筋を描写している。

「応城は前線基地です。戦線の第一線です。毎日〳〵百度の暑い焼けるような街です」とあり、ここにおける生活では、「目下の所ドラムカンの御湯に入る事、日中木影で昼寝をする事が唯一の楽しみです」と記し、「精神的なものは一切影の如く消へてたゞ肉体の強靱な闘ひのみです。戦争はたしかに一切の感念（観念）をこへた力の世界のものです。然し不思議な美しい魅力に満ちてゐるものです」との感想や「ハンゴで大根の切ぼしの中食をこんなにうまくたべる前線の生活について、色々御知らせしたい事だらけですが、いずれ又書きましょう。一寸した戦争や軍人達の家を想ふ話を聞いては、すぐに涙もろくなる自分を不思議に思ってゐます」とも書いている。

また、この前日には、妻の美子が藤原義江歌劇団のアイーダに出演する歌舞伎座に電報を送るために、「又一日トラックにのって漢口まで」行き、朝日新聞の通信局から電報を送っている。

応城には、「二三日ゐまして再び前線

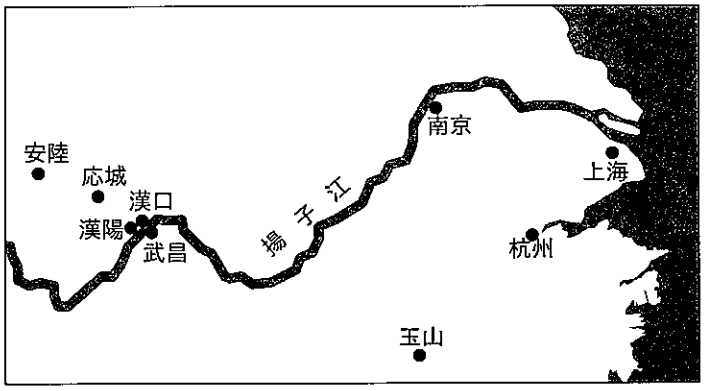

図1 関係地図

に出ます。安陸と云ふ所で残壕（塹壕）生活を二三日するつもりでゐます」とあり、安陸へ向かう予定であった。前日である「今夜は朝日の特派員の人々とニワトリを取りに行ってごちそうを作ろうと云ふ相談をしてゐます。うまく取れると有難いです」と記している。

六月八日　〇〇前線基地にて

五月三〇日、応城を出発して「長い長い黄塵の道を灼熱の太陽にやかれトラックの激動に全身をいためられて十二時間、安陸と云ふ最前線に出かけて」（Ⅳ―32―1）、そこに滞在した後、「九日目にやっとこゝまで帰りついた所です」と応城に戻り手紙を記している。佐藤敬は、この安陸に向かう途中に京山で負傷してしまう（佐藤敬一九七九）。「トラックの走行中不幸にして右手に思ひがけないけがをして、焼きつくようないたさをこらへて、こゝの医務室で治療を受け続けました」、「幸ひきずは悪いばいきんも入らず日一日と全快し大変大きいきずはのこりましたが、昨今ではすっかりよくなり、ほうたいも取り、手紙もこの通りしっかり書いてゐますから御心配は入りません」と記している。七月一〇日の手紙には、「僕が前線でけがをした事意外に大きく方々につたわってゐる事困りますね。どうか皆なさんに何んでもない事御知らせ下さい」とあり、関係者には大きく伝わっていたようである。

安陸については「爆撃の跡もものすごく廃屋がるい〳〵と裸身の如くならび、日中百五十度の温度に燃へてゐる街です。街と云っても日本軍の多くと土民の少数しかいない生活のない街です。たゞあるものはマラリヤと疫病の流行です」と述べている。昼は「寒だん計がいつも〳〵最上まで登りつめて百二十度以上は何度かわからない暑」さ、「夜は電気は勿論火の気のない暗い夜」であったが、「それでも朝晩少しづゝスケッチを続けました」とある。

この手紙では「前線の実感を少し伝へましょう」と、前線の様子も伝えている。佐藤・猪熊の二人は、安陸を「我々の基地にして更に前進、最前線の第一線、残壕（塹壕）まで行きました。それは又トラックで〇〇時間〇〇〇の前面です。こゝは目のすわった我が勇敢なる兵隊の戦場です。この第一線の見学を終へて一度又安陸にかへり更に前進―もうトラックも大分なれました」と、いくつかの最前線まで赴いている。行程は「しょせん道なき道を進むのです。トラックは十名位の兵隊の掩護の下に、まるで波の上にたゝかれる小舟のような激動振りです。顔はふけども〳〵まるで黄色の粉オシロイをたゝきつけられるような黄塵の熱風です」との状態であった。到着した「黄〇〇と云ふ基地」において宿泊している。

写真1 従軍の様子
（佐藤美子資料Ⅳ-32-1）

翌日、そこを出発し、「こゝからトラックは入りません。もうこの辺はがたる山脈の中で云ふ所の大洪山山脈」となり、山上の陣地へと向かった。それまでの「汗とほこりのかはり、こゝは四方を敵にかこまれた恐怖と勇気の興奮の登山です」と記し、「こゝは今でも最もはげしい激戦を続けてゐます。勿論敵の弾丸の下をくゞる決心ですし、一命を天にまかせた静じゃくの心境です。山ははるかにそびえてゐます。一歩一歩登りました。勿論多くの護兵と××部隊長自からの案内ですが、一寸のゆだんもなりません。第×陣地についた時は、あゝつかれた頭に国にのこした妻や子供を思はない訳に行きませんでした」と到着するまでの様子を述べている。「然しこゝではまだ敵の陣地とは遠いので」、「更にいよ〳〵最も敵と密接してゐる×陣地まで草の中にしのび木の影に身をふして山の背にかくれて進みました」と、更に近い陣地に向かっている。

目的の陣地には夕方に到着した。ここは「石をつみ上げ巨木で圧したけん固な陣地ですが敵は目の下に居ます。肉眼でもよく見へます。遠目がねで見れば一手一足の動きまで実によくわかる」ほどの近さであった。ここの様子を「いよ〳〵敵は草むらにチェッコの機関銃をすへました。パンパンパン、ヒュッ、ヒュッとハンカチをやぶるような音が聞へます。火をふく敵は夕やみと共に我々の陣地を打（撃）ち初めました。兵隊は〇〇名しかゐませんが、たい然として敵に向ひます。これは演習ではないのです。実戦です。僕と弦さんはめがねのうばひ合ひで陣地の一角からながめます。まだ明るい夕暮です。すっかり目の下に敵の少しの動きも目に映じます。ヒュッとたまが頭上をかすめます。思ずひょいと頭をちじめる気持は決して恐しいからではなくたゞ反射的にをこる運動です。夜が深くなる所敵はうちやみました」と記している。

「我々は兵隊さんと一緒に石窟の陣地の中に一夜を送る事になりました」とそこに宿泊した。後の回想では、この時の様子をより生々しく記述している。

数日の後、「無事黄××まで下山した時は、たゞ何かに感謝したい気持で一杯でした」と述べ帰路につく。トラックが通る道路まで馬で行き、そこから応城まではトラックに乗車した。この時に「新四軍の捕虜を四名、なわでしっかりゆはへてトラックのせてゐました」と「新四軍の捕虜」と同乗することになり、「私は一名の捕虜とならんで、この男のするどい目とにくにくしい身

振りを全身に感じながら、今は知感も忘れはて、トラックの中でいねむりを初めました」と記している。

この手紙の翌日には、応城から漢口に戻る予定で、「明日漢口にたちます。未だ漢口南京で少しも仕事をしてないので、これから仕事の期間になる次第です」と、漢口などでは仕事をすることになると記している。

この手紙には、写真が同封されている（写真1）。裏面には、「これは、パパが兵隊さんになって、鉄砲を撃っているところを、猪熊おぢさんが写真を撮っているところです」（原文カタカナ）とあり、場所は分からないが、銃を構えている人物が佐藤敬のようである。

六月一八日　漢口

応城から漢口への帰路も、往路同様にトラックに同乗した。往きは炎天下であったが、帰りは「雨の後のぬかるみの悪路です。丁度前に行ってゐた別の隊のトラックがすべってクリークの中に逆転しました」とぬかるみの中を帰ることになった（IV—36—3）。

漢口では、「多くの中国文化人との座談会をやらされたり、新聞関係の用事が出来たりして」一週間程の滞在となり、「いよ〳〵本日出発致します」と南京へ向かうことになっていた。往路は飛行機であったが、「今度は揚子江を船で下ります。三日で南京に着く予定です」と揚子江を船で下る予定であった。

翌一九日付の「揚子江を下りつゝ」という絵はがきでは（IV—37—4）、「船で長い長い黄色の水の流れている川を、お船で下っています。いろいろな山や、街が見えます。亜土やママにも見せてあげたいと思います」（原文カタカナ）と書き送っている。

六月二四日　南京にて

南京には、二一日には到着し、届いていた息子亜土の絵や写真の感想を絵はがきで送っている（IV—37—3）。この中で一週間ぐらい仕事をして上海へ向かうと書いている。

この地では「私達は毎日南京のあちこちを写生をして廻ってゐます。描く所は多いし時間はないし、なか〳〵作品も出来ませんが全力を尽してゐます」とあるが、一方で「然し今度の旅行は所謂御土産絵を多く描いて持って帰るより、支那の長い歴史に根を下ろしてゐる色々なフォルムや精神を頭に入れて未知のものを色々知った勉強の方が私には大いに栄養になったようです」と述べている（IV—36—5）。

写真2 息子亜土に送ったトラックの絵
（佐藤美子資料IV-37-8）

南京については、「南京は美しい風景の街です。こうした雑々とした世相に超然として古い寺や湖が自然の不思議な魅力をほこってゐます」と述べて、「一昨日は一歩城壁を出て玄武湖に写生に参りました。アカシヤと楊樹に取りかこまれたこの湖はとても美くしいと思ひますが、どうも僕等の感じるプラステイクからは遠い風景です。しかしそこに浮かんでゐる画房（長椅子を並べた美くしい支那式の船です）は何とも云へない生活の臭ひを持ってゐる美くしい船です。この船で湖上を一廻する訳ですが、この上で毎日いとなまれるであろう若い人達の感激、人間の喜劇、あらゆる悪徳、そうした人間をつゝむ自然の影—二枚ばかりスケッチをしました。玄武湖は南京城壁をつくるために掘った人工の湖だと云はれます。支那人の神経の大きさにはあきれます」、また「昨日は鶏鳴寺と云ふ古ひ寺に行きました。この寺はすぐ玄武湖の上にあって紫金山と南京大観をするのに都合のい、寺です。こゝも大変美しい展望でした。今日もこれからそこに出かけます。とても日中暑いけれど深い木立にかこまれてゐるこの寺はまだ仕事が楽です」と各地を廻っている。

日程的には、「もうそろ〳〵帰る用意に取りかゝり」、「上海で都合した経済的なもの、後しまつと」、この従軍の目的である「南京報道部に対する仕事の責任」が、残る課題となっていた。

また、二二日のドイツ・ソ連の開戦を知り、「全世界を取りかこむ新しい人間の感動、精神、能力、そうした形似上学的な世界に於ける人間性の新たなる誕生について考へさせられるものを強く感じてゐます。これからは旧い感情や感覚ではものを理解する事は困難となりましょう。又組織力や技術や体力なぞも其の価値が段々変って参りましょう。いよ〳〵大変な時代になったと思います」との感想を書いている。

七月二日　南京市泰山閣にて

南京滞在は「日一日と予定よりのびてゐますが」、「総軍報道部にのこす油絵と朝日の御礼の油絵を描ひて行く方があとで心配がないので初めた次第です。今日で出来上りました。あとまだ朝日の新聞用絵の原稿が六枚あります」と、日々、軍報道部へ残す絵や朝日新聞へのお礼の絵画を描いていた（IV—35—4）。また、市内を写生に廻り、「漢口や九江のヨーロッパ的なのに反して、こゝの裏街は純粋な支那です。こわれた家、はげ落ちたレンガの壁、ペンキのあざやかな色等、とても面白

ひのですが、何分時間におはれてゐる関係余りスケッチも出来ません。それでも一通りは描きました」と感想を述べている。

一方で朝日や報道部などの「宴」にも招待されている。例えば、前日には「昨夜はとても素晴らしい画房上の盛宴でした。朝日の支局長の招宴で支局の一同と我々で玄武湖上に美くしい舟を浮かべて―所謂フラワー・ボートです―チッキン・ボートを従へて湖上に出ました」、「一流の飯店から来た支那人の料理人がすぐ後の舟で鴨を丸焼きにしてゐる臭が食慾をそそります。まるで熱湯の中にゐるような南京も、こゝまで来ると別の世界です。とても楽しい食事でした」と記している。

七月一〇・一六日　上海

南京を出発し、上海には九日頃に着いたようである。ここでは「上海画廊に六、七点絵をのこす必要があり、これを毎日一枚ずつ手をつけて約十日間で仕上げるつもりでゐます。もう今日は二枚目ですが、なか〳〵うまく進みません」（一〇日付、Ⅳ―35―5）、また、一六日付の手紙でも「目下毎日八時に起きて夕方まで仕事をしてゐます。もう五枚目に手をつけました。出来るだけ多く仕事をして借金の額を少なくしたい一心です。帰って日動に多少は払はなくてはならないかと思いますが、それが出来るだけ少なければ気が楽なわけです」（Ⅳ―35―6）と、毎日、画廊に残す絵を描いている。

一方で「夕方は大底（大抵）どこかによばれて、猪熊君と二人切りで食事をする日は当地に着きまして一夜もない有様です」（一六日付）とあるように、南京同様に軍・朝日新聞や画廊関係などとの付き合いも多かったようである。例えば「上海は清野、笠原、広ちゃんと新制作の出品者村尾さんを初め三人ばかりゐますので、毎日夜はにぎやかです。朝井君も長坂春雄君も二三日前までゐました」（一〇日付）や「一昨日は宏太郎君と会社の副支店長がフランス借界のア・ラ・ロトンドと云ふレストランに二人をよんでくれまして御馳走になりました。丁度七月十四日カトウズ・ジュイエで、久し振りにフランスへ行ったようでした」（一六日付）、「昨日は南京より朝日の南京支局長の石尾さんが来まして上海で一等大きいパーク・ホテルで四五人で御馳走になりました。これはやはり英租界の中心にある十九階のすごいホテルです。それから朝日の車を出してフランス租界一帯のドライブを致しました」、「明日は軍報道部関係の会食が予定されてゐます」などであった。また、絵画以外の仕事では、「今夜は当地の大陸新報社の文化問題座談会です。日本人クラブで丁度独立の会員が来てゐましたので、その連中と一緒に美術を主に話しあいました」もあった。

ところで、帰国が近づくと「御土産」についても言及している。一〇日付には、「木棉とタオルは常識で持てるだけは持って行きます。〔略〕コーヒも少し持って行けるでしょう。靴は入りませんか一足位なら持ち得られるかも知れません。キッドの白靴の素晴らしいものがありますよ」と書き、また「特にほしいものがあったら御知らせ下さい」と書き送っている。しかし、一六日付では、「御申出の品々丁度内地持込困難の品で困りました。皮類、毛織類は特にやかましいのです」とあり、日本国内に持ち込めないものが多かった。それでも「ベニは村尾さんにたのんでいゝのを求めてゐます。宏太郎君がサラシとタオルを、上海画廊の清野君がコーヒをそれぞれ買って呉れました」とあり、息子へは「美しい西洋の絵本と珍しいオモチャ」（原文カタカナ、Ⅳ―37―10）を選んでいる。上海では、「絵具カンバスはルフランがまだ手に入ります」（一〇日付）と、戦時の国内では手に入らないものが流通していた。

帰国は「十七、十八両日の飛行機を朝日より特別便で申こんであるのです」とあったが、「この数日天候不良にて欠行のため二三日おくれる由でがっかりしました。多分十九日か廿日頃に乗れる事になるそうです」（一六日付）と天候のために遅れている。その後、七月中に帰国している（朝日七月三一日夕）。

帰国後

出発前に、佐藤と猪熊は「軍報道部より記録画として、中支復興平和建設をテーマにした作品を依頼」されたが、結局、描かなかったので問題になったという（佐藤敬一九七九）。同年九月の新制作派第六回展には、「安陸戦趾」・「安陸前戦」などを出品している（大分県立芸術会館一九七九）。また、陸軍省海軍省編纂『靖国の絵巻』昭和一六年秋季（陸軍美術協会、一九四一年一〇月）には、「陸鷲巫山爆撃」が収載されている。この巫山爆撃は八月八日とあり、玉山爆撃を参考にしたものであろう。この他、『朝日新聞』紙面にも、七月末から八月中旬に「中支・夏の彩管行」として、佐藤・猪熊と支那派遣軍報道部の志生野少佐・鷹尾中尉による「『絵に見る戦争』の感慨」を絵とともに連載している。先に見た「新聞用絵の原稿」が、これであろう。

【参考文献】
佐藤敬『遥かなる時間の抽象』（アドバンス大分）一九七九年、針生一郎ほか『戦争と美術　1937―1945』（国書刊行会）二〇〇七年（迫内祐司二〇〇七は同書、佐藤敬画の解説）、『佐藤敬遺作展』（大分県立芸術会館）一九七九年、防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　中国方面陸軍航空作戦』（朝雲新聞社）一九七四年、同『戦史叢書　支那事変陸軍作戦3』（同）一九七五年。「第三飛行集団戦闘要報新第一三号」は、アジア歴史資料センターRef. C04123000100昭和一六年「陸支密大日記　第一八号」（防衛省防衛研究所）、『靖国の絵巻』は、國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター「研究事業『招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究』」のwebより。

（百瀬　敏夫）